

看護学教育における国際交流活動に関する学生の意識調査

Nursing Students' Views on International Exchanges in the Nursing Education

西頭 知子, 月野木 ルミ, カルデナス 暁東,
小林 道太郎, 小林 貴子

Tomoko Nishito, Rumi Tsukinoki, Xiaodong Cardenas,
Michitaro Kobayashi, Takako Kobayashi

キーワード: 国際交流活動, 看護学教育, 看護学部学生

Key words: international exchange, nursing education, nursing students

I. はじめに

グローバル化する知識基盤社会, 学習社会にあって, 国際通用性を備えた, 質の高い教育を行うことが必要となっている(中央教育審議会大学分科会, 2008)。「知」はもともと容易に国境を越えるものであることから, グローバル化は教育と密接な関わりを持つ(文部科学省;国際教育交流政策懇談会資料, 2009)と言われており, 現代の大学の担うべき公共的な使命であることが指摘されている(中央教育審議会大学分科会, 2008)。さらに, 社会のグローバル化に伴い, 健康問題は国際的な視野から対応する必要に迫られており, 看護問題についても, 国際的視野での検討は不可欠であり, 看護学の発展という面からも同様である(大学基準協会, 2002)。「大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会-最終報告-」(文部科学省, 2011)では, 学士課程においてコアとなる看護実践能力と卒業時到達目標の一つとして“グローバル化・国際化の動向における看護の在り方について理解できる”ことが挙げられており, コアとなる看護実践能力の一つとして国際看護および国際交流の推進が重要視されている。

本学部でも, 「地域・国際社会に貢献できる人材」の育成を教育目標の一つに掲げており, 異文化理解の講義の他, 看護学部国際交流委員会主催によるセミナーや国際交流シンポジウムの取り組み等, 看護学教育・研究に寄与する国際交流活動を推進している。また, より効果的な国際交流活動を展開するため, 私立看護系大学協会に加盟する129校を対象に, 看護系大学における国際交流の実態と課題を明確にすることを目的とした先行研究を行った(カルデナス他, 2013)。自記式質問紙調査の結果からは, 国際交流活動を実施する際に, «人的資源の限界»«資金の乏しさ»«言葉の問題»«カリキュラムの制限»«不十分な体制づくり»«環境的限界»といった課題が存在していることが明らかとなった。これらの課題を踏まえつつ, 平成25年度からは台湾の台北医学大学看護学部との交流も始まり, 今後ますます国際交流活動を活発化していきたいと考えている。

本研究では, 看護学部在学中の学生を対象としたアンケート調査を実施し, 看護系の大学または看護学部学生の国際交流活動や国際看護に関する教育へのニーズを明らかにすることおよび, 国際交流に関

するニーズと意識を知ることに加え、現在本学部で実施している国際交流活動が、学生のニーズや興味と合致したものであるか評価し、活動への参加者を増やす方策を講じるための示唆を得、今後の国際交流活動を推進していくための資料とすることを目的とする。

II. 研究方法

1. 対象

本学看護学部在学中の1~4年生348人に質問紙を配布した。124名から回答が得られ(回収率35.6%)、全てが有効回答であった。このため、124名全てを分析の対象とした。

2. 調査方法

調査には、無記名の自記式質問紙を用いた。必修科目等の授業時に、口頭と文書で研究への協力を依頼し、質問紙を配布した。学内に設置された鍵付きポストを回収箱とし、質問紙配布1週間後に回収した。質問紙への回答と回収箱への投函をもって研究への同意とした。

3. 調査項目

質問紙は、先行文献(濱畑他, 2004)を参考に作成し、現在本学部で実施している国際交流活動の評価と、活動への参加者を増やす方策を講じるための示唆が得られるよう、項目を追加した。質問への回答方法は選択法および自由記述とした。内容は属性、旅行や留学等の海外経験、外国語能力、海外への留学や就職の希望、国際交流への関心、国際交流活動に対する希望、海外での学生研修に関する希望等であった。

4. 分析方法

選択法により得られた回答は単純集計を行った。自由記載内容に関しては、一つの意味毎に区切り、語彙の意味を変えないように要約しコード化した。コードを類似性のある内容で集めサブカテゴリーを抽出したのち、複数のサブカテゴリーを集約してカテゴリーを抽出した。結果の妥当性と信頼性を高めるため、複数の研究者間で統一した見解が得られるまで協議した。

5. 倫理的配慮

本研究は、大阪医科大学倫理審査委員会の承認を得て行った。対象となる学生には協力依頼時に、調査目的は対象評価ではなく成績評価とも結びつかないこと、研究への参加は自由意思に基づくものであり参加辞退によって何ら不利益を被らないこと、匿名性を保障し個人は特定されないこと、無記名のため、同意撤回ができない旨を口頭および文書で説明した。

III. 結果

回答が得られた124名は、女子学生111名(89.5%)、男子学生12名(9.7%)、未回答1名(0.8%)であった。学年は、第1学年32名(第1学年92名中34.8%、全回答者の26%)、第2学年41名(第2学年91名中45.1%、全回答者の33.3%)、第3学年9名(第3学年84名中10.7%、全回答者の7.3%)、第4学年41名(第4学年85名中48.2%、全回答者の33.3%)であった。

1. 海外経験

これまでに海外に渡航した経験がある学生74名(59.7%)、経験がない学生49名(39.5%)であった(未回答1名(0.8%))。海外渡航経験の内容は、「旅行」が一番多く57名(77.0%)、次いで「研修(修学旅行等)」27名(36.5%)、「1ヶ月以下の語学研修・留学」11名(14.9%)、「海外ボランティア・協力活動」1名(1.6%)であった。渡航先は、「東アジア(中国、台湾、韓国)」37名(50.0%)、「北米」32名(43.2%)、「アジア(中国、台湾、韓国以外)」22名(29.7%)、「ヨーロッパ」12名(16.2%)であった。

2. 外国語学習状況と外国語能力、専門英語習得の必要性についての考え

英会話能力について、英検等の資格を有している学生は56名(47.5%)、内訳;英検2級17名、英検準2級23名、英検3級14名、TOEIC555点1名、TOEIC440点1名)であった。その他、会話能力を有している言語は、中国語4名、ドイツ語5名、韓国語1名であった。

外国語の学習機会の有無について、大学の講義以外に定期的な学習の機会を持っていると答えた学生は8名(6.5%)に留まり、114名(91.9%)は学習の機会を持っていないと答えた(未回答2名(1.6%))。

外国人と交流する機会の有無は、ありと答えた学生が20名(16.1%),なしと答えた学生は102名(82.3%)であった(未回答2名(1.6%))。

看護職として活動する上での専門英語の習得の必要性について、必要であると答えた学生は75名(60.5%),必要なし9名(7.3%),わからない39名(31.5%)であった(未回答1名(0.8%))。必要な理由に関しては、「外国人患者とのコミュニケーション」が最も多く69名(92.0%),次いで「英語の医療用語・本・論文の読解」43名(57.3%),「学会・会議での英語の口頭発表」15名(20.0%),「英語論文や英文の執筆・作成」5名(6.7%)であった(表1)。

3. 将来の希望

将来の海外への留学・研修の希望について、希望すると答えた学生52名(41.9%),希望しない学生37名(29.8%),わからないと答えた学生33名(26.6%)(未回答2名(1.6%))であった。希望する学生の主な目的については、「語学の勉強」43名(82.7%),「看護研修」20名(38.5%),「国際協力活動」18名(34.6%),「看護師免許の取得,就職」11名(21.2%),「海外の

大学・大学院進学」8名(15.4%),「国内にいる在日外国人の保健・看護活動」6名(11.5%)等であった(表2)。

将来,海外で看護職として就職や協力活動をする希望については,あると答えた学生が54名(43.5%),ないと答えた学生は58名(46.8%)(未回答12名(9.7%))であった。

4. 国際交流および海外の看護事情についての関心

国際交流や海外の看護事情について関心があると答えた学生は87名(70.2%),関心がないと答えた学生は34名(27.4%)であった(未回答3名(2.4%))。

本学部で行っている国際交流活動の中で知っている活動については,「国際交流セミナー」66名(53.2%),「ランチョンセミナー」63名(50.8%),「海外医学生の看護学部見学案内」43名(34.7%),「国際交流シンポジウム」35名(28.2%)であった。これらの国際交流活動への参加経験については,「経験なし」と答えた学生が105名(84.7%),そのうち,「関心があるが経験なし」としたものは43名(34.7%)であった。参加経験がある学生は15名(12.1%)に留まっ

表1 専門英語習得が必要な理由(「必要」と回答した者のみ, n=75, 複数回答)

	人数	(%)
外国人患者とのコミュニケーション	69	(92.0)
英語の医療用語・本・論文の読解	43	(57.3)
学会・会議での英語の口頭発表	15	(20.0)
英語論文や英文の執筆・作成	5	(6.7)
その他(海外で働くため)	1	(1.3)

表2 海外研修・留学および海外就職の希望状況 (n=125)

	人数	(%)
海外研修・留学の希望		
あり	52	(41.6)
なし	37	(29.6)
わからない	33	(26.4)
海外研修・留学の目的(希望者のみ回答 n=52, 複数回答)		
語学の勉強	43	(82.7)
看護研修	20	(38.5)
発展途上国などの国際協力活動	18	(34.6)
看護師免許の取得および就職	11	(21.2)
海外大学・大学院進学	8	(15.4)
国内にいる在日外国人の保健・看護活動	6	(11.5)
海外の看護研究者との共同研究	4	(7.7)
海外の施設・療養環境を知る	1	(1.9)

た (未回答4名 (3.2%))。

国際交流活動に参加しなかった理由については、「時間が合わない」が最も多く57名 (54.3%)、次いで「一緒に参加する友人がいない」28名 (26.7%)、「国際交流に関心がない」20名 (19.0%)、「国際交流に関心があるが、活動内容やテーマに関心がない」11名 (10.5%)、その他「英語が話せない」「活動を知らなかった」5名 (4.8%)であった。また、今後取り組みを期待する内容については、「海外研修」70名 (56.5%)、「語学教育」35名 (28.2%)、「海外の学生研修の受け入れ」33名 (26.6%)、「在日外国人・留学生との交流会」24名 (19.4%)、等であった (表3)。

セミナーやシンポジウム等で取り上げてほしいテーマについては、「海外留学」57名 (46.0%)、「海外における看護の実践」49名 (39.5%)、「国際協力活動」48名 (38.7%)、「海外就職」35名 (28.2%)、「海外の文化・生活」33名 (26.6%)、「語学」26名 (21.0%)であった。

5. 海外での学生研修への希望

海外における学生研修への参加希望については、「希望する」59名 (47.6%)、「希望しない」21名 (16.9%)、「わからない」41名 (33.1%)であった (未回答3名 (2.4%))。

希望する研修内容については、「病院・医療施設訪問」41名 (69.5%)、「現地の人や学生との交流」37名 (62.7%)、「看護・医療に関する講義」36名 (61.0%)、「語学研修」31名 (52.5%)等であった (表4)。

6. 国際交流活動と海外での学生研修に関する意見および希望

国際交流活動および海外での学生研修に関する自由記載に対しては、分析対象者124名中25名から回答があり、54のコードが得られた。これらのデータから、【留学・海外研修の希望】【活動拡大への希望】【現在実施されている活動に対する評価】の3カテゴリーが抽出された (以下、【 】はカテゴリーを、[]はサブカテゴリーを、「 」はコードを示す) (表5)。

表3 今後、看護学部で取り組んでほしい国際交流活動 (n=124, 複数回答)

	人数	(%)
海外研修	70	(56.0)
語学教育	35	(28.0)
海外の学生研修の受け入れ	33	(26.4)
在日外国人・留学生との交流会	24	(19.2)
海外留学・就職経験者の体験談	22	(17.6)
看護学部独自の国際交流・英語関連の部活・サークル	21	(16.8)
海外の外国人看護職・研究者による講義・研修等	21	(16.8)
遠隔授業	2	(1.6)

表4 本学看護学部海外研修に関するニーズ (n=125)

	人数	(%)
本学海外研修への参加希望		
あり	59	(47.2)
なし	21	(16.8)
わからない	41	(32.8)
希望研修内容 (参加希望者のみ, n=59, 複数回答)		
病院・医療施設訪問	41	(69.5)
現地の人や学生との交流	37	(62.7)
看護・医療に関する講義	36	(61.0)
語学研修	31	(52.5)
文化体験	14	(23.7)
英語による発表・スピーチ	4	(6.8)
ボランティア	1	(1.7)

表5 国際交流活動に関する意見および希望 (自由記載)

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
留学・海外 研修の希望	留学・海外研修の希望 (10)	語学研修や留学に行ってみたい (6)
		看護に関する留学や海外研修を, 学校主催で行ってほしい (2) 海外研修があってもよいとおもう 海外留学のあっせんをしてほしい
	留学・研修制度の整備に 対する希望 (7)	留学制度を作ってほしい (5) 海外留学や海外研修に参加する場合の休学制度がほしい (2)
		実施時期・期間に対する 希望 (5)
	内容に対する希望 (7)	発展途上国でのボランティア アジア圏の医療のレベル アメリカなどの最先端の医療現場を見たい(2) 発展途上国の医療現場を見たい 看護だけでなく医療全般にふれたい 現地の学生との交流をたくさん入れてほしい
費用の心配 (2)	研修に行ってみたいが, 費用の面で難しい 費用の補助があればいいと思う	
国際交流活 動の拡大へ の希望	国際交流活動への参加 の機会を増やすことへ の希望 (3)	4年の総合実習で国際関係の領域があったらいい 機会をいっぱい設けてくれたら参加したい 授業以外の講座等があればいい
	学内での留学生との交 流の希望 (7)	留学生との交流が増えればいいと思う (4) 留学生との交流会のようなイベントがあればいきたい 接点がなければ(留学生に)なかなか話しかけないと思うのもったいない 留学生との交流ができれば楽しい
	語学学習への希望 (4)	語学の授業をもっと取り入れてほしい もっと語学力を養えば海外への関心も高まると思う 「英会話教室」をしてほしい 英語の授業をもっと有効活用できないかと思う
現在実施さ れている活 動に対する 評価	看護学部での留学生受 け入れに対する評価 (4)	留学生との交流会は楽しかった 留学生受け入れの制度はいいと思う 英語力乏しいながらも, お互いが理解しようとして話せたのがとてもよかった 余裕のある時期だったら, プライベートでも交流を深めることができたと思う
		情報伝達の不足 (5)
	活動実施時間の設定に 対する不満 (2)	土日以外にもやっていただけると行きやすい 時間が合わない

* () 内は各コード数

【留学・海外研修の希望】は[留学・海外研修の希望][休学等の制度の希望][時期・期間の希望][内容の希望][費用の心配]の5つのサブカテゴリーで構成されていた。留学や海外研修を希望する学生は、「アメリカなどの最先端の医療を見てみたい」「発展途上国の医療現場を見てみたい」「現地の学生との交流をたくさん入れてほしい」等の希望を持っていた。また、参加する場合には、「試験期間や実習期間を考慮してほしい」と考えており、休学を含めた留学制度を整備することへの希望が挙げられた。また、参加の希望はあるが、費用の面で難しいとの意見もあった。

【国際交流活動の拡大への希望】は[国際交流活動への参加機会を増やすことへの希望][学内での留学生との交流の希望][語学学習への希望]の3つのサブカテゴリーで構成されていた。「留学生との交流が増えればいいと思う」「留学生との交流があれば楽しい」等、学生は留学生との交流を希望しており、また、その他国際交流活動への参加の機会を増えることを希望していた。さらに、「語学の授業をもっと取り入れてほしい」「英会話教室をしてほしい」等、語学学習への希望も挙げられた。

【現在実施されている活動に対する評価】は[看護学部での留学生受け入れに対する評価][情報伝達の不足][活動実施時間の設定に対する不満]の3つのサブカテゴリーで構成されていた。「留学生との交流会は楽しかった」「英語力が乏しいながらも、お互いが理解しようと話せたのでよかった」等、留学生との交流会についての評価や、情報伝達が不足していること、活動実施時間が合わないことへの不満等が挙げられた。

IV. 考察

今回のアンケート調査の結果から、本看護学部の学生は、国際交流や海外での看護活動への関心が高く、海外留学や研修および将来の海外での就職や協力活動に興味を持つ等、海外志向が高い学生が多いことが示された。また、将来看護師として活動する上での外国語の必要性も感じていた。しかしその反面、現在外国語の学習をしている学生は少なく、学内で実施している国際交流活動に参加経験のある

学生も少なかった。また、海外での学生研修の参加希望は約半数がもっており、現地の病院・医療施設の訪問や現地の人や学生との交流を望んでいた。これらの特徴について考察し、本学部の国際交流活動の推進に向けての具体的な内容について検討する。

1. 国際交流および海外での看護活動への関心

質問紙に回答した学生の6割に海外への渡航経験があり、また、7割が国際交流や海外での看護事情に関心を持っている等、学生の海外への志向が高いことが示された。海外留学や研修、将来の就職や協力活動への希望を持つ学生は4割に留まったが、内閣府が行った労働者の国際移動に関する世論調査においても、海外での就労に関心がある20代は約4割と報告されており(内閣府, 2010)、日本の一般的な若者と同傾向が示されたと言える。また、この内閣府の調査では、海外での就労への関心は男性で高く女性では低い傾向があったとの報告もあり、本調査対象の学生は9割が女子学生であり、回答者も女子が9割を占めていたことを考えると、女子学生においては、一般的な20代よりも海外志向が高いことが考えられる。看護大学の学生を対象にした先行研究においても、海外の看護事情や将来看護職として国際交流をすることへの関心が高い学生が多いことが示されている(濱畑ら, 2004)。看護は専門職であり、学生は大学の4年間を通して将来の仕事に直結した学びをしていることから、海外での就労を含めて、将来の展望を描きやすいことが考えられる。

また、学生の6割以上が将来看護師として活動する上での専門英語の必要性を感じていた。この理由としては、“外国人患者とのコミュニケーション”が9割以上を占めており、国内で就労する場合にも外国人と接する機会が多いことを想定していることが考えられる。しかし、必要性を感じてはいるものの、現在外国語の学習機会を持っている者は1割に満たず、語学の習得に向けての具体的な行動には結びついていないことが示された。一方では、海外留学や研修を希望する目的として8割以上が語学研修と答えており、学内の国際交流活動に関する自由記載においても、【語学学習への希望】があげられる等、語学学習へのニーズが示された。これらの結果からは、

学生が将来に向けて語学の必要性を漠然と感じてはいるものの、自ら行動に移すだけの動機付けが不足していることが考えられる。

専門英語の必要性を感じる理由については、“外国人患者とのコミュニケーション”以外では“英語の医療用語・本・論文の読解”と回答した者が6割であった。この結果と、国際交流や海外の看護事情に関心をもっている学生が7割、海外での就職や協力活動の希望をもっている学生が4割であることをあわせて考えると、学生は語学の習得を、“将来看護師としてより幅広く活躍することやキャリアアップするための手段”として捉えていることが窺われる。

2. 本学で実施されている国際交流活動への参加と関心

本学で実施している国際交流活動への参加については、8割以上の学生が経験なしと答えたが、その内の3割は活動への関心を持っていた。不参加の理由として“時間が合わない”との回答が最も多かったことから、学生が参加しやすいように日程を調整することで、参加が促されることが期待できる。一方、不参加の理由として、“国際交流には関心があるが活動内容やテーマに関心がない”との回答が2割あったことから、学生の興味や関心を引く、魅力のある活動となるような内容の検討が必要である。

本学で国際交流活動の一環として実施している国際交流シンポジウムは、対象を本学部学生だけでなく、医学部学生や附属病院職員、近隣住民等広く設定しているため、テーマの決定においては、学生以外の人々にも広く興味を持ってもらえることを考慮している。

活動初年度である昨年のシンポジウムの学生参加者は6名と少なく、学生の参加を促すことが運営上の課題となっている。一方で、参加学生からは概ね好評な意見が得られたことから、テーマの設定だけでなく、案内時にその内容をより分かりやすく伝えていくことや、終了後に参加者からの感想等を含めた活動の報告を行っていくことで、活動への理解を促すと同時に、次回活動に参加してみようかという興味につなげていけるのではないかと考える。また、国際交流活動に関する自由記載で寄せられた内容に

も、「国際交流シンポジウムなど、掲載が小さく、知らないことがある」「何をしているのかよく分からない」等【情報伝達の不足】が挙げられたことから、まずは、学生に実施している交流活動を周知することが必要である。

海外における学生研修については、約半数の学生が希望を持っていた。その内容は、“病院・医療施設訪問”が7割、“現地の人や学生との交流”“看護・医療に関する講義”が6割、“語学研修”が5割であった。本学では、台湾の台北医学大学と交流協定があり、本年度より看護学部間での交流をスタートした。今年度末に本学部学生が台北医学大学へ研修に行くことも決定しており、その研修内容は、病院・医療施設の訪問や現地学生との交流等、本調査において海外研修に学生が希望すると回答した内容とほぼ合致している。また、現地での語学学習は行わないが、研修までの約4ヶ月間、非常勤講師による英語のレッスンが行われることになっており、学生の希望がほぼ叶えられる内容となっている。このような機会を提供することにより、学生たちの国際交流への関心をさらに高めると共に、学習のモチベーションになることを期待する。

また、台北医学大学看護学部からは平成25年度7月に約1ヶ月間、9名の学生を受け入れ、附属病院および関連施設の見学、授業の聴講や演習の見学、本学部学生との交流等を行った。この間、学生たちは授業や演習の他、茶話会、週末を利用した観光等で交流を深めることができた。本調査の自由記載からは、「留学生との交流会は楽しかった」「留学生との交流が増えればいいと思う」等、留学生との交流を楽しんだことや、今後も留学生との交流を希望していることが窺われた。今後、学生が海外研修できる制度を整備していくことも重要であるが、海外研修以外に学内でできる活動を充実させていくことで、国際交流に関心の高い学生だけでなく、あまり関心のない学生にも広く国際交流できる機会を提供することができ、より多くの学生に国際交流への関心をもってもらうきっかけを作れるのではないかと考える。

3. 本学部の現状とニーズに合った国際交流活動の取り組みへの提言

本調査の結果から、本学部学生の国際交流活動や海外での看護活動に対する関心の高さが示された。このことから、これらの学生のニーズに応え、より関心を高めていくと同時に、希望する留学や海外での就職、国際協力活動への将来の実現可能性を高めることができるような機会を提供することが必要である。国際交流や海外の看護事情に関心を持っている学生は7割、海外での就職や協力活動を行うことに対する希望を持っている学生は4割おり、今後、学部内で実施するセミナーやシンポジウム等で取り上げてほしいテーマについても“海外留学”が4割強と最も多く、“海外における看護の実際”“国際協力活動”が4割、“海外就職”が3割であった。これらの結果から、学生は、留学や海外での活動に関する実際的な内容を求めていることが窺える。本学部の学生が、海外志向は高い半面、語学の習得等には積極的でないことを鑑みると、留学や国際協力活動に関する実際的な内容をテーマに取り上げることで、それらを実現するためのレディネスを学生が理解し、実現に向けて意欲的に取り組む動機づけになるのではないかと考える。

また、学生の国際交流活動への不参加の理由として、“時間が合わない”との回答が最も多かったことから、学生が参加しやすいような日程の調整も必要である。日程に関しては、学生の参加しやすい時期が各学年により異なることも考慮し、1年間で複数回の実施が可能な学内学生向けのセミナー等に関しては、各開催時期に参加しやすい学年に焦点を合わせてテーマを設定することも効果的ではないかと考える。その他、事前の学生への案内を充実させることや、実施後に活動の報告を行い参加者の感想等を紹介していくことで、参加しなかった学生にも活動の内容を伝えていくことが必要である。このような取り組みにより、海外留学や研修への希望および看護師の専門英語の取得の必要性を“わからない”と回答し態度を保留にした約3割の学生の関心を引くことにもつながることが期待できると考える。

本学では、「国内外問わず如何なる地域においても

活躍できる医療従事者を養成する」ことを教育の目標としており、本学部でも「国際社会に貢献できる人材の育成」を目指している。その目標のもとに、平成25年度から台北医学大学看護学部との交流も開始しており、今後、国際交流活動に関心をもって本学部に入学を希望する学生が増えてくることも考えられる。看護学教育における国際交流活動には、人的資源の限界や言葉の問題、不十分な体制づくり等の課題が存在することが先行研究より明らかになっている(カルデナス他, 2013)。これらの課題の打開策としては、「国際的視点を持ち文化を超えた対象理解に関する教育ができる教員と十分な外国語能力のある教員の確保」「教職員の外国語の学習環境づくり」「特定の教職員の負担を大きくしないため、全教職員の国際交流への意識向上、スキル向上のためのFDの実施および各種の研修会への参加の支援」等が提案されている(カルデナス他, 2013)。学生の留学や国際交流活動を推進するには、本人の意思に加えて、大学教職員の支援が欠かせず、今後大学として制度や環境を整えていくことも必要である。

本研究では、本学看護学部にて在学中の1~4年生348人を対象とし、回答が得られた124名(回収率35.6%)の結果をもとに、本学部の国際交流活動の推進に向けての方向性を検討したが、分析対象となった124名には、もともと国際交流に関心をもっていた者が多く含まれていた可能性がある。国際交流への関心が高く、海外留学や研修および将来の海外での就職や協力活動に興味を持っている学生の意欲を高めると同時に、関心のない学生が関心を持つきっかけを与えられるような活動を行っていくことが必要であると考えられる。

V. 結語

本研究結果は、先行研究(カルデナス他, 2013, 濱畑他, 2004)の報告を裏付ける結果となった。日本の看護系大学における国際看護や国際交流活動を計画・実施する上で、看護学部生のニーズや実態を知る有用な資料となる可能性がある。将来国際看護に関心がある学生に対しては、低学年早期からの自発的な語学教育の推進や学習機会の提供を行うと

もに、グローバリゼーション・国際化の動向における看護の在り方について理解できることが学士課程で必要な看護実践能力であることを認識してもらい、より積極的な国際交流活動参加を促す必要がある。

また、本学部学生が国際交流や海外の看護事情への関心が高い実態も明らかとなり、将来の留学や海外での活動等の実現に向けての意欲を高める各種国際交流活動の展開が必要であることが示唆された。平成25年度から台北医学大学看護学部との交流がスタートすることから、国際交流に関心の高い学生のニーズに応じていけることが期待されるが、同時に海外研修に参加しない学生に対しても、本学が受入れている留学生との学内での交流活動を活発化することで、国際交流への関心をもつ学生の裾野を広げていきたいと考える。学生の国際交流活動への関心を高め、ニーズに応じていくためには本人の意思に加えて、大学教職員の支援が欠かせず、今後大学として制度や環境を整えていくことも必要である。

文献

カルデナス暁東, 西頭知子, 月野木ルミ他 (2013) :
日本私立看護系大学の看護学教育における国際交

流活動に関する実態調査, 大阪医科大学看護研究雑誌, 3 : 147-156.

中央教育審議会大学分科会 (2008) : 学士課程教育の構築に向けて (審議のまとめ), http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afeldfile/2013/05/13/1212958_001.pdf

大学基準協会 (2002) : 21世紀の看護学教育, http://www.juaa.or.jp/images/publication/pdf/21_century_nurse.pdf

濱畑章子, 片岡由美子, 米田雅彦他 (2004) : 看護学生の国際交流に関する意識調査, 愛知県立看護大学紀要, 10 : 27-32.

文部科学省 (2011) : 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会—最終報告—, http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/40/toushin/_icsFiles/afeldfile/2011/03/11/1302921_1_1.pdf

文部科学省 (2009) : 国際教育交流政策懇談会資料, http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/kokusai/004/gijiroku/attach/1247196.htm

内閣府 (2010) : 労働者の国際移動に関する世論調査, <http://www8.cao.go.jp/survey/h22/h22-roudousya/>